

愛知県立大学国際関係学科

「プロジェクト型演習」実践報告

—2015～2017年度の3か年の取り組み事例—

亀井伸孝・宮谷敦美・東 弘子・
高阪香津美・松林康博・草野昭一

第1節 アクティブラーニングと「プロジェクト型演習」 導入の経緯

1. はじめに

本論は、愛知県立大学外国語学部国際関係学科で2015年度より開講している新科目「プロジェクト型演習」の実践報告として、2015～2017年度の授業内容の紹介と成果・課題の検討を行い、本学におけるアクティブラーニングの望ましいあり方を展望することを目的とする¹⁾。

2. アクティブラーニングと PBL

「アクティブラーニング」は、「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う（溝上2016: 7）」学習を指す。

アクティブラーニングの代表的な手法である PBL は「問題解決学習 (problem-based learning)」と「プロジェクト学習 (project-based learning)」の2種類がある。「問題解決学習」は医療系分野で開発された。具体的な問題が与えられ、必要な情報を収集、問題を解決し、学習内容や解決法を振り返りのもと整理する。このプロセスを通して、基礎と実世界とを繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度などを身につける（溝上 2016: 6-8）。一方「プロジェクト学習」は、「実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習」であり、「学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、

問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身につける」ものである(溝上 2016: 11)。

本論で紹介する PBL は、「プロジェクト学習 (project-based learning)」である。プロジェクト学習が問題解決学習と異なる点は、「プロジェクトのテーマが教師から与えられたものであっても、それを解決すべき問題は学生自身がたてる」こと、「最終プロダクトを仕上げるのが重視される」ことであり、本論で報告する実践ではすべてこのふたつの方針が貫かれている。

3. 「プロジェクト型演習」導入の背景

国際関係学科では、2014年度のカリキュラム改編に伴い、必修科目として、「プロジェクト型演習」が加わった。これにより、学科設立時からの「学科基礎科目(必修)」である「基礎演習Ⅰ」(1年次通年)、「基礎演習Ⅱ」(2年次前期)に加えて、2年次後期まで演習形式で学ぶ体制が整えられた。

それぞれの演習科目の位置づけは以下の通りである。基礎演習Ⅰは、大学でいかに学べばよいかに焦点を当て、アカデミックスキルのうち「ものの調べ方」²⁾を中心に学ぶ。基礎演習Ⅱは、基礎演習Ⅰでの学習をさらに発展させ、発表資料の作成方法と発表の仕方、討論の仕方を学ぶ。

この2科目で、基礎的な調査や研究方法を身に着けるためのカリキュラムは整備できていた。しかし2年次後半に演習科目が設置されていないことで、基礎演習での学びが3年次以降の研究演習に接続されにくいという問題が見えてきた。また、「学外に学びの場を拡げ、手を動かしながら学ぶ」ことが、国際関係学科のいくつかの専門分野において有用であることや、「自ら課題を設定し解決に向かって計画、実施する力」の養成が重視されていることから、PBL型の授業の導入が効果的であるという結論に至った。

そこで、2015年度から始まった「プロジェクト型演習」では、学科教員の専門分野を活かし4～5種類の異なる PBL 型授業を開講している。

第2節 「プロジェクト型演習」の概要

ここで紹介するのは、2015～2017年度の後期に開講された「プロジェクト型演習」である。半期で2単位を取得できる演習科目である。

2014～2018年度入学者においては、同科目は必修科目とされており、全員が在学中に履修することとされている。制度上は2～3年次配当と位置づけているが、2年次後期に他の演習系の科目が無いこともあり、2年次後期に履修することが推奨されている。

開講クラス数は年度により異なり、1年目は5クラス、2年目と3年目は4クラス、3年間合計でのべ13クラスが開講された。学生たちの関心の動向の変化などを反映して履修人数の増減もあるが、全体を通じて、平均13.2人という少人数のクラス編制を採用している（表1）。

この科目は、各教員がそれぞれもちあわせた知識、技能、学外人脈などの多様な資源を活用して行う演習であるため、クラスによって取り組む課題と目標が異なっている。過去に開講された6種類のプロジェクトの概要を、表2にまとめた。例年7月に全体説明会を行い、これらプロジェクトの概要を学生に開示する。各学生が、自分の関心や適性を考慮して、優先順位を付けて履修希望届を提出、人数調整を行った上で、クラス分けが行われる。同一時間帯に開講されるため、複数クラスの同時履修はできない。

各プロジェクトは、それぞれのシラバスに従って別個に半期の演習を進めるが、最終成果が出そろう学期末に、全プロジェクト合同の成果報告会

表1 各プロジェクト（クラス）の年度別履修者数（単位：人）

プロジェクトの番号と担当教員	2015年度 (5クラス)	2016年度 (4クラス)	2017年度 (4クラス)	履修者計	各プロジェクト 平均履修者数
(1) 草野昭一	8	12	13	33	11
(2) 東弘子	6	18	10	34	11.3
(3) 宮谷敦美	18	12	21	51	17
(4) 亀井伸孝	12	18	—	30	15
(5) 松林康博	10	—	—	10	10
(6) 高阪香津美	—	—	13	13	13
履修者計	54	60	57	171	13.2
各年度平均履修者数	10.8	15	14.3	13.2	13.2
前年度入学者数	57	60	58		

出典：愛知県立大学学務課提供情報。「—」は不開講の年度。小数点以下2桁目を四捨五入した。開講はいずれも各年度の後期（半年間、15回）。「プロジェクト型演習」は2～3年次配当科目であるため、おもな履修者層として前年度の入学者が想定されている。留学や時間割の都合を理由に、3年次に履修することを選ぶ学生もおり、必ずしも総数は一致しない。

表2 各プロジェクト(クラス)の名称、担当教員、概要

<p>プロジェクト(1)「新聞スクラップ：アナログで情報の貯水池をつくる」(担当教員：草野昭一、開講年度：2015、2016、2017)</p>
<p>デジタル情報のあふれる今日、あえて時代に逆らってアナログな新聞スクラップをつくり、関心のあるテーマについてまとめた「情報の貯水池」をつくらうという試みである。検索して分かったつもりになったが、消えてしまう情報ではなく、手元にスクラップという「見える」かたちで積み上がっていく、手応えある情報の醍醐味を知ってもらいたい。</p>
<p>プロジェクト(2)「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補生との交流と発表」(担当教員：東弘子、開講年度：2015、2016、2017) (2016年度開講名称「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補生との交流」、2017年度開講名称「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補者との交流」)</p>
<p>このプロジェクトでは、旧 HIDA 中部研修センター(豊田市)で研修を行っている、EPA(経済連携協定)に基づく介護福祉士候補生(インドネシア人)との交流会を実施し、双方が準備した「インドネシア紹介」「日本紹介」をもとに、日本語でグループディスカッションをおこなう。EPAに基づくインドネシア人介護福祉士候補生向けの日本紹介冊子の作成と、本プロジェクトの活動報告書を作成する。</p>
<p>プロジェクト(3)「あいち Ambassador プロジェクト：1 day trip プランづくり」(担当教員：宮谷敦美、開講年度：2015、2016、2017) (2017年度開講名称「あいち Ambassador プロジェクト：愛知のディープな魅力に迫る体験プランづくり」)</p>
<p>このプロジェクトでは、外国人を対象に、愛知のよさを体験してもらうための一日旅行のプランを作成し、コンペを行います。このプロジェクトワークを通して、地域における観光資源や産業を理解すること、相手のニーズをくみ取り提案する力と、わかりやすいプレゼンテーションをする能力を身に付けることを目指します。</p>
<p>プロジェクト(4)「写真・映像による調査と表現」(担当教員：亀井伸孝、開講年度：2015、2016)</p>
<p>このプロジェクトでは、写真の撮影・加工・展示や、映像の撮影・編集・上映のスキルを身に付けることによって、社会調査(とりわけフィールドワーク)の技法に習熟することをねらいとします。学外調査と、情報の加工・表現技法を体験することを通じて、クリエイティブな研究ができるようになることを目標とします。</p>
<p>プロジェクト(5)「『新聞記事にのっちゃうかも？岡崎の中心市街地の情報発信』プロジェクト」(担当教員：松林康博、開講年度：2015)</p>
<p>このプロジェクトでは、愛知県岡崎市を訪問して、岡崎の地元ポータルサイト、岡崎パンチに特集記事として、岡崎の記事を書いてもらいます。新聞などのメディアに掲載してもらうよう働きかけ(プレスリリースの作成)まで行う予定の広報プロジェクトです。</p>

プロジェクト(6)「ワンピースプロジェクト(1)：地域の子どもたちに県大の魅力を発信する」(担当教員：高阪香津美、開講年度：2017)

このプロジェクトでは、大学とはどのようなところか、大学で学ぶとは、大学で働くとはどのようなことなのかを、高校生のほか、小学生や中学生を含めた地域に暮らす子どもたちに知ってもらうため、愛知県立大学の魅力がたくさんつまった冊子を「学生目線」で作成します。

出典：『国際関係学科専門科目「プロジェクト型演習」選択のための手引き（2015年度版～2017年度版）』および合同成果報告会プログラム。概要説明は、初開講年度ものを抜粋して引用した。プロジェクト番号(1)～(6)は、本論における便宜上の通し番号であり、開講年度当時はプロジェクトA、B、Cなどの名称が振られた。

を行っている。プロジェクトによっては、それ以外に、独自に学内外において成果報告行事などを行うことがある。

第3節 各プロジェクトの実践事例紹介

本節では、各プロジェクトが実際にどのように実施されたか、それぞれのプロジェクト担当者がその実践内容を具体的に詳述する。プロジェクトのタイトルは、年度によって若干の語句の変更があるため(表2)、ここでは、各担当者が提示した代表的なプロジェクト名を見出しに掲げている。

1. プロジェクト(1)「新聞スクラップ：アナログで情報の貯水池をつくる」 (草野昭一)

近年の学生たちと付き合っていて感じることは、彼らが最先端の情報端末をひっきりなしに覗き込みながら、驚くほど「無知」であるということだ。新聞も本も読まなくなっていることと大いに関係している。「記銘」という点で、活字情報とデジタル情報とでは圧倒的な差異があると言えよう。

筆者の担当するPBLのテーマが「新聞スクラップ帳」であるのは、まず第一に学生たちに新聞に親しんでもらいたいからである。筆者にとって、毎日早朝に、新聞紙を手に取り活字に見入るのは至福の時である。新聞はけだし「福袋」である。とてつもない「お宝記事」に出会えることがある。デジタル情報と違い、情報の「階層性」がはっきりわかるのも新聞の魅力である。

情報にはフローとストックがある。活字情報の新聞であっても読みっ放しでは、記憶に残りにくいし、ましてやデータとして活用することなどで

きない。そこでストックが必要になる。いわば情報の「貯水池」である。おもしろいことに情報をストックすると「流れ」が見えてくる。情報の「流れ」が見えるようになればそれは知識になる。新聞の場合それは「スクラップ帳」でありそのままデータとして使える。

デジタルの特徴は「時間と空間の圧縮」であり「重力からの解放」であろう。情報に瞬時にアクセスでき、世界に向かって瞬時に情報を発信できる。もちろん情報のストックもでき、電子辞書の利便性に見るごとく、片手に乗せて操作するだけで紙媒体換算で何トンもの情報に検索をかけることができる。

反面、情報が「ブラックボックス化」しがちなのがデジタルの世界である。情報の「感触」がないのである。その点で、「スクラップ帳」は情報のありかを「手」と「目」が記憶している。ジャンル別にあるいはテーマごとにスクラップ帳を作っておけば、目当ての記事をたちまち探し当てることができる。しかもページを繰っているとさまざまな記憶が甦る。「道草」ができるのもいいし、デジタルと違って疲れない。

さて演習の進め方だが、初回に各人の関心分野を示してもらった。「紛争」「難民」「憲法」「TPP」から「築地市場移転」「やくざの組織分裂と抗争」まで多岐にわたった。問題は、いくら関心が強くても新聞に掲載される頻度があまりに低い場合である。そのような場合には関連性の強い他のテーマに誘導したり、「教科書問題」のように約20年ほど前の記事を図書館で「発掘」できることを示唆することもあった。そして各回に3～4人の学生に記事のコピーを説明してもらい、それに筆者がコメントをしたり他の学生の意見を聞いたりという形で進めていった。

回を重ねるうち、例えば中東の紛争と難民問題が、ヨーロッパ「統合」の根本的矛盾と絡み合っていたりというように、テーマの広がりや次元が大きく展開していくことがある。そうしたことに学生が「手応え」を感じたりするのが何よりの成果であった。

「成果物」には市販のスクラップ専用のノート（扱いにくい）ではなく、A4サイズのノートを活用してもらった。それは見開き2ページ分に新聞半面がびったり収まるのである。ノート4分の1程度の学生もいたが、「TPP」のようにノート2冊分たっぷりになった学生もいた。あれほど世の中を騒がせた「TPP」「築地市場移転」を扱った（元）学生は今何を思うだろう。

2. プロジェクト (2) 「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補者との交流」(東弘子)

(1) 目的と概要

本プロジェクトは、AOTS 中部事務所（豊田市）で研修中の EPA（経済連携協定）に基づくインドネシア人介護福祉士候補者（以下「候補者」とする）と約 2 か月間に 3 回の交流活動をし、その学びを学期末の成果発表会と報告文にまとめるものである。対話や共同作業などを通じ、相手をよく知ろう、自分のことを知ってもらおうとすることで、これまで気づかなかった、自己の外国人へのまなざし、価値観、学習観、日本に関する知識などのありかたについて見つめなおす機会とする。

また、特定の地域出身の、特定の目的を持った日本語学習者である外国人と、日本語でコミュニケーションをはかる実践を通して、適切な語彙や発話スタイルの選択、わかりやすい表現の工夫、相手の知識を確認する手法等、日本語を調整することの重要性を学ぶとともに、ステレオタイプに依存した自我理解から、個別性へと目を向けることができるようにする。

研修中の候補者の属性・背景や今後の業務や研修を考慮し、どのような活動が望まれるのか検討して準備を進め、プロジェクトの後はディスカッションを通じて新たに発見できた課題を共有する。本クラスは科目設置年度の 2015 年より毎年継続しており、2018 年度は、4 回目の実施となっている。

授業実践の概略は表 3 の通りである。

候補者が集中研修を行っている AOTS で 2 回、愛知県立大学で 1 回、通常の授業時間帯とは別日程をとり、候補者と学生は 2～3 時間の交流活動をする。授業ではその準備とふりかえりを繰り返す。

表は 2017 年度の例で、活動内容は、パートナーの AOTS 担当者と相談しながら年度ごとに修正を加えている。2015 年度は、候補者 1 クラス（16 名）に対し学生 6 名で、初回訪問時に「日本とインドネシアの子ども時代の遊び」の紹介、プロジェクト 1 で陶芸体験（於、陶磁美術館）と大学案内、プロジェクト 2 は相互の文化紹介プレゼンテーションであった。2016 年度は、候補者 3 クラス（計 54 名）に対して学生 18 名が 3 グループに分かれ交流した。初回訪問では各クラスの見学および交流、プロジェクト 1 で大学祭の案内、プロジェクト 2 は、クラスごとに別メニューを立て、①相互の文化紹介プレゼンテーション②日本およびインドネシア料理の調理

表3 2017年度プロジェクトBスケジュール表(履修者10名、候補者22名)

回	日付	曜日	開講方法	場所	内容
—	7月31日	火	臨時集合	研究室	登録決定者への事前説明会： スケジュールと留意事項伝達
1	9月28日	木	別日程開講 (学外見学)	AOTS 中部事務所	【訪問】候補者による施設案内、 会話交流；観光スポット紹介
2	10月3日	火	通常	指定教室	見学のフィードバック、今後の 活動について
3~5	10月10, 17, 24日	火	通常	指定教室	プロジェクト1(大学案内と ディスカッション)準備
6	11月1日	水	別日程開講	県大長久手C	【プロジェクト1】大学案内、 グループディスカッション
7	11月7日	火	通常	指定教室	プロジェクト1のふり返りと プロジェクト2の準備
8~10	11月14日	火	通常	指定教室	プロジェクト2(プレゼンテー ション：日本事情紹介)準備
11	12月6日	水	別日程開講 (学外)	AOTS 中部事務所	【プロジェクト2】プレゼン テーション
12	12月12日	火	通常	指定教室	プロジェクト2のふり返り
13・14	1月9, 16日	火	通常	指定教室	グループごとの報告文作成、 合同発表会準備
15	1月23日	火	通常	大教室	合同発表会(A~Dクラス)



写真1 調理実習(2016年)

実習(写真1)③岡崎市への小旅行の3つを実施した。運営規模が大きくなり、教員1名では行き届かない点もあったことから、翌年の2017年度は、2016年度の活動内容を精査して、シンプルなものとした。

(2)では、主に2017年度の実施内容に基づいて報告する。

(2) 実践と評価

(2)-1 事前準備・事前課題

履修にあたり、EPAによる受入制度やインドネシアに関する授業を履修しておくこと等は義務づけていない。ただし、候補者と個別に対話をする機会が多くあるため、事前に一定程度のインドネシアに関する一般的な知識やEPA介護福祉士の制度に関する基本的な情報を得ておく必要があることを学生には伝え、受入事業関係のウェブサイト³⁾の閲覧などを推奨している。

また、授業外での活動が多く、グループおよびクラス全体で課題やファイルを情報共有する必要があるため、大学で導入しているeポートフォリオmanabaを活用している。初回の活動の段取りも、夏季休暇中でもmanabaで確認でき、グループ毎に学生は、グループメンバーの人物紹介や交流時の話題「日帰り旅行おすすめスポット」の準備を進める。

(2)-2 交流・プロジェクトの準備・実践

まず、初回訪問での、研修施設の見学と候補者とのグループ会話交流をふまえ、簡単なレポート（①訪問の報告②候補者との会話、説明、交流を通じて気づいたこと③今後に向けて留意すべきこと）の提出をする。授業では、見学時に不明だった点や、全員から出された意見や気づき等について確認しあい、次の活動に向けての参考とする。

プロジェクト1は、大学案内とディスカッションである（写真2）。具体的な相手に対して、目的を考えつつ、案内の経路やディスカッションのテーマについて議論をしながら、内容と方法を決めていく。授業時間でも、教室にとどまらず、グループごとに自由に作業をするようにした。候補者サイドの意見との調整も



写真2 ディスカッション（2017年）

図りながら、ディスカッションのテーマは①ファッション②恋愛③若者言葉、となった。各グループとも、自分に身近な事例を紹介しつつ、お互いの共通点や違いを見出すことができた。

プロジェクト2は、プレゼンテーションで、候補者は集中研修での学びの紹介(チームケアの効果、日本人の働き方等)、学生は日本の紹介(日本の年末年始、金沢旅行、冬のあたたかい甘い食べ物、結婚式)で、パワーポイントを用いて発表、質疑応答、その後コメントシートを交換した。コメントからは、史実よりも発表者の実際の旅行体験が興味を引いたり、初詣の際の具体的な身振りが好評だったり、何度も説明した結果「アルコール0%の甘酒」がうまく伝わらなかったりなど、「ゆっくり話す」「ルビを振る」だけではない、多様な伝え方の工夫が必要なことを学生たちは学んでいる。

(2)-3 成果の発表と評価

3回の交流活動による学びは、合同成果発表会と各自のレポートにまとめられる。評価は、プロジェクトに取り組む姿勢や全体への貢献度、最終レポートによりなされる。候補者からの大きな期待を感じるからであろうか、過去3年間の実施において、ほぼ全員の学生が無遅刻無欠席で、どの活動にも積極的に取り組んでおり、教員としては、高く評価している。

(3) 社会との連携の側面

候補者たちは、有用な介護人材として日本社会で期待される中、自身のスキルアップを目指して、専門性の高い技能や言葉や文化習慣を、短期間の研修で忙しく学ぶ日々である。そうした中で、雇用や研修とは関係ない学生との交流は、今後日本に暮らす候補者が一個人として同世代の日本人と関わる数少ない貴重な機会である。学生にとっても、候補者の顔や名前を知って個々人として交流したことが、「人手不足の職業分野への外国人材受入」といった大きな日本社会の課題について、漠然と不安に感じるのではなく、具体性を持って考えるきっかけとなり、広く日本社会が「多様な人」によって構成される状況を、積極的に捉えるきっかけになるであろう。

(4) 交流による学び

成果発表会のスライド作成では、交流活動で学んだ「聞き手の知識や状

況を踏まえて情報選択をする」ことを意識し、自主的に役割分担をしながら全体が協力体制をつくるようになる。その発表で言及された、学生自身の学びのいくつかを紹介する。

(初回交流での学び) 相手が知っているだろうと思い込んで使った日本語や、擬態語が通じなかった。日本について尋ねられても答えられず日本について改めて考えるきっかけになった。

(プロジェクト1での学び) 大学案内では、学生にとって当たり前の有料のコピー機など、予想外のものに興味を示した。説明が長引きうまく時間配分ができなかった。ディスカッションでも、事前準備が足りず予想外の質問に回答できないことがあり、準備と柔軟性が次回への課題となった。

(プロジェクト2での学び) 言葉遣いをより意識をして発表に臨んだが、質疑応答で思わぬ質問があると、速いスピードや難しい言葉を使ってしまい、その場で対応することの難しさを知った。実体験を含んだ話をするとより分かりやすく、効果的である。

(授業全体を通しての学び)。

- ・聞き手がわかりやすいようにシンプルに話す
- ・相手のことを積極的に知ろうとすること
- ・相手の視点に立つこと
- ・相手との違いを尊重する

このように、プロジェクトによる実体験から多くを学び取っている。

3. プロジェクト(3)「あいち Ambassador プロジェクト：愛知のディープな魅力に迫る体験プランづくり」(宮谷敦美)

「あいち Ambassador プロジェクト (以下、観光 PBL)」は2015年度から開講している。観光 PBL の課題は、愛知の魅力を外国人が体験できる観光プランの作成である。①地域の観光資源の理解、②ニーズ調査と提案方法、③発表技法を身につけることを目指してプロジェクトを設計した。

観光 PBL は、名古屋国際会議場 (2015年度～)、愛知県振興部観光局および政策企画局広報広聴課 (2016年度～) の協力を得ており、MICE⁴⁾と観光施策に関する講義と、発表会でのフィードバックを担当していただいている。学生の成果物は、名古屋国際会議場で採用される可能性がある。また、2017年度からは学生が取材した観光地の記事が愛知県広報広聴課の公式 Facebook ページに掲載されるなど、成果物を公表・実現する場を

確保している。履修者数は、2015年度18名、2016年度12名、2017年度、21名であった。

(I) 授業内容

授業内容は、学生や協力機関からのフィードバックを得て少しずつ改善を加えている。表4は2017年度の授業内容である。第1回の授業では、

表4 あいち Ambassador プロジェクトの授業内容

回	授業のテーマ	教室活動・方法に関する学習	学外連携
1	タスクの明確化・チーム決定		
2	愛知県の観光資源には何があるか 外国人向けの観光情報発信サイト	観光行動について、自身の知識と経験を話す [内省と意識化] インターネット調査 [方法]	
3	実務家による講義 MICE・名古屋国際会議場の取り組み	授業前の情報要約と質問整理 反転学習	名古屋国際会議場
4	観光テーマのコンセプト ターゲットとなる観光客	ブレインストーミング [方法] 統計資料の分析 [方法]	
5	ターゲットの仮決定 スライド作成について	スライド作成 [方法]	
6	ターゲットのニーズに関する調査 観光地に関する調査 SNSでの広報方法	SNS使用の経験を話す [内省と意識化]	
7	コンテンツの作成 観光計画シートの作成	情報の構造化 [方法]	
8	中間発表準備		
9	中間発表 ターゲット、コンセプト、課題の明確化	発表へのコメント作成 ピアフィードバック	名古屋国際会議場 愛知県
10	観光プランの精査 ターゲットにとって魅力的な説明とは？	魅力的な広報文を探し、特徴を探す [方法]	
11	プレゼンテーションのコツ確認 観光地に関する SNS 記事の改善	発表のしかた [方法] 記事へのコメント [ピアフィードバック]	
12	発表リハーサル	発表へのコメント [ピアフィードバック]	
13	名古屋国際会議場での成果発表会	発表へのコメント [ピアフィードバック]	名古屋国際会議場 愛知県
14	学科全体発表会	他プロジェクトへのコメント [ピアフィードバック]	
15	自身の学びのふりかえり	成長と課題の整理	

プロジェクト課題の提示とプロジェクトでどのように学ばよいかについて説明する。その後、観光PBLを履修した理由と観光に関する関心について全体でシェアし、チームを形成する(写真3)。第3回の実務家による講座の前には、予習課題を与え講師への質問を事前に準備する、いわゆる「反転学習」⁵⁾を取り入れ、ディスカッションの時間を増やす工夫をしている。第4回以降は、プロジェクト課題の達成を目指し、チームによる話し合いを中心に進めていった。



写真3 第1回チームわけ活動

毎回の授業では、教師がやり方を示してそれに沿って課題に取り組むのではなく、課題で用いた方法や得た知識について、学生がシェアした後、教師がアドバイスするようにした。

プロジェクト設計時に工夫したのは、①毎回取り組むタスクを明確にし、身につけるスキルや知識を意識化させる、②調査や分析方法について共有する機会を作る、③成果物が実社会で活用される場を作り、プロジェクトへの動機づけを高める、の3点である。

(2) 学修成果と社会への還元

観光PBLでは、履修学生全員が観光地の紹介記事を作成する。この記事は、2017年度から愛知県広報広聴課の公式Facebookに実際に掲載されている(図1)⁶⁾。さらに、学期終了後に学生がプロジェクトの

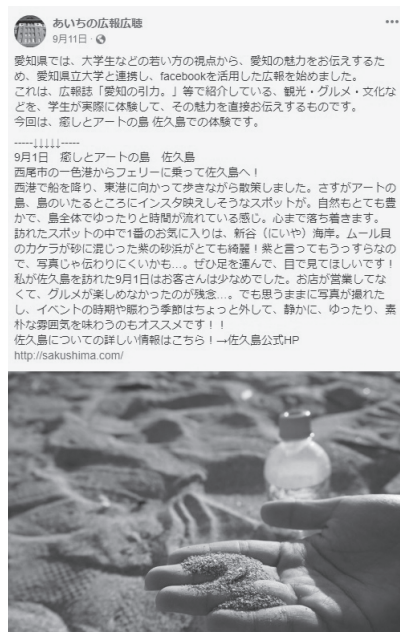


図1 Facebook記事の例

継続を希望した場合は、担当教員が正課の枠を超え、地域の自治体等との交渉補助や助言をしている。

これまでに課外の活動につながったものが2例ある。ひとつは、2015年度履修生が作成した観光プランの実現である。名古屋国際会議場で2016年5月に開催された国際影響評価学会において、なごやめしと日本酒を楽しむ「Dine Out 企画」と「名古屋市内散策プラン」を学会運営委員会と共に実施した⁷⁾。この取り組みは学会からも高い評価を得て、学会から感謝状が届いた。また、2016年度の学生チームが、2017年度に本学の「学生自主企画研究」として研究を継続し、常滑市に広報提案を行った。この成果として常滑市観光協会の公式インスタグラムの運営マニュアルを作成している⁸⁾。さらにJTBが主催する「大学生観光まちづくりコンテスト2017」に応募し、全国大会ポスター発表チームに選出された⁹⁾。

(3) 観光 PBL での学生の学び

観光 PBL では、最後にプロジェクトでの学びを振り返りレポートを執筆する。学生自身の学びについては、①技能に関すること（発表や資料収集方法など）、②リサーチ・リテラシーに関すること（信頼できるデータを探す、データに基づき意見を述べるなど）への言及が多い。また、学生自身の課題については、自身の知識の欠如（「いかに愛知を知らないか気づいた」）のほかにも、プロジェクトそのものの進め方に関する言及（「チームでの役割分担と情報共有をどのように行ったらよいか考えさせられた」）があり、実践を通して学び方そのものを内省している様子もうかがえた。

(4) 3回の実践を通して見えた PBL 学習での留意点

本授業では、学生から授業に関するフィードバックを得て、次のプロジェクト設計に反映させている。PBLを通して意識的に学ぶことの重要性に気づいた学生がいる反面、教師が正解を提示しない PBL に対して不満を抱く学生も存在する。これまでの実践から、教師の役割として重要であると考えるのは、学生に課題とゴールを明確に提示することに加えて、「主体的な学びのプロセス（プロジェクトを遂行する中で、学ぶべき知識やスキルが何かを学生自身が考え行動し、それが課題の達成に適切であったかをふりかえること）」が重要であると理解できる働きかけやしかけをコース設計にいれこむことである。この点については、稿を改めて考察したい。

4. プロジェクト(4)「写真・映像による調査と表現」(亀井伸孝)

このプロジェクトでは、ふたつの目標を掲げている。ひとつは、本学科の秋の恒例の「旅の写真展」を実施すること、もうひとつは、映像制作ワークショップを通じてドキュメンタリー映像作品の創り方を学び、自作の映像作品の公開上映会を行うことである。半期の間に、写真と映像の2種類の媒体を活用したアウトプットを達成することがねらいである。

(1) プロジェクト成立の背景：課外活動経験の蓄積

これらの活動には、それぞれ背景がある。「旅の写真展」は、2011年に旅行好きの学生有志によって企画された課外活動「国際関係学科フィールドワーク・フェスタ」の一環として始まった。学生たちが撮影した写真を印刷し、学内で小展示会を開催するという活動を始め、教員としてもそれを支援した。学科の特色ある行事として、毎年秋の恒例開催を続けてきた。

映像制作については、愛知県立大学教育・研究活性化推進費事業として、2012年度に「映像技術を活用したフィールドワーク教育の振興」、2013年度に「映像技術を中心としたフィールドワーク技法の教育と成果の社会還元」が実施された。これらの事業で、映像関連機材の整備が進み、そのスキルを活用して調査、研究に取り組む学部生や院生が学内に増え始めた。

このような経験の蓄積を背景として、「プロジェクト型演習」が科目として発足した際、おもに課外活動で取り組まれてきたこれらの取り組みが、単位を伴う正課としての位置づけとともに再スタートを切る形となった。

(2) スケジュールと課題

半期でふたつの達成課題があるため、ややタイトなスケジュールとなる(表5)。おおむね前半の1か月半は、写真展開催のための作業に専念する。写真パネルの制作と展示が完成すると、写真展の開催期間中は時間の余裕ができるため、並行して映像制作の準備に着手する。

後半の2か月半は、写真展の撤収作業を除き、ほぼ映像制作に専念する。映像については高度なスキルと経験が必要であるという観点から、外部ゲストを招聘したワークショップを2～3回開催することが通例となっている(表5の★、年度によって招聘回数や指導内容は異なる)。また、最終上映会は、可能な限り、類似の教育に取り組んでいる他大学の学生たちとの合同企画として実施する(表5の☆)。2015年度は名古屋で、2016年度

表5 スケジュールと課題、作業内容の概要(後期授業10月～翌年1月)

月	課題	具体的な作業内容
夏期休暇	写真撮影	履修予定者が、旅行先などで多種の写真撮影して くる課題に取り組む
10月	写真展の準備	写真の整理と選定、合評会、印刷、パネル制作、展示 企画の立案
11月	写真展の開催	会場設営と展示、開催期間中の展示物巡回と管理、撤 収、振り返り討論
	映像制作の準備	グループ分け、企画立案、事前調査、★映像制作ワー クショップ(撮影編)
12月	映像制作の実施	各グループの自由撮影、★映像制作ワークショップ (編集編)、★仮編集版の試写と合評会
1月	映像の完成と公開	再編集、字幕付与、最終作品の完成、☆公開上映会

出典：2015、2016年度の実践に基づき、亀井伸孝作成。★は外部講師を招聘したワー
クショップ、☆は他大学との合同行事を示す。

は大阪で、いずれも桃山学院大学の映像制作実習のクラスと合同上映会を
行った。映像鑑賞と討論を通じ、相互の学び合いと交流を行う機会となっ
た。

(3) 具体的な成果物と実績

写真展では、学生たちが各自2～3枚のパネルを自作する。A3の写真
用光沢紙に印刷し、「貼れるパネル」に貼付、カッターで周囲を整形して



写真4 旅の写真展
(2016年11月、学内にて亀井伸孝撮影)

パネルを完成させる。これら
を展示会場に運び込み、全員
総出で釘打ちをして設営す
る。学科全体に開かれた行事
として、授業履修者以外の出
展参加も受け入れており、
2015年度は24カ国・地域で
撮影された42人による90点、
2016年度は22カ国・地域で
撮影された44人による92点
の写真展が実現した(写真
4)。2015年度は学内展示、

2016年度は通常の学内展示とあわせ、大学祭での臨時展示も行い、多くの来場者の観覧の機会を得た。

映像制作では、原則として2人1組でグループを作り、各グループが約5分のドキュメンタリー映像作品を完成させる（2015年度は個人による制作を許容した例がある）。約2か月半の間に、それぞれがフィールドワーク、インタビューなどを通じて撮影を進め、最後にはメッセージ性の明確な作品が完成する。2015年度は7グループ（12人）による7作品、2016年度は9グループ（18人）による9作品が完成、それぞれ最終上映会を実施した。

(4) 達成と課題

本プロジェクトの達成として、まず、全員が写真撮影と映像撮影というフィールドワークを経験することが挙げられる。事前に撮影のノウハウと倫理を教示し、それらを活かして調査に臨むということを全員が経験する。

2点目に、情報を加工して人に見せる具体的な工程を経験し、そのスキルを身に付けることが挙げられる。情報の消費者に留まるのではなく、自らが発信する側に立つという意識で調査を行い、最終成果物を不特定多数の人たちに見せるという経験は、調査能力の向上に寄与する。SNSなどを通じて簡便に情報の入手、加工、発信ができる時代にあつて、あえて写真パネルを手作りし、釘を打ち、映像を作って上映会を開催するといった工程を経験することは、学生個々人の発信力の選択肢を増やすことにつながる。

3点目に、社会や地域との連携の側面を挙げたい。写真や映像を私的に楽しむだけでなく、公共の空間に作品として開示するという営みは、学生たちに発信者としての自覚をもたらすとともに、学内に閉じない社会的なつながりの創造をもたらしてくれる。この演習経験者らを中心に、「愛知県とイオン株式会社との連携と協力に関する包括協定」の枠組みを利用した、愛知県内のイオンモールでの公開写真展が、これまでに2度実現している（2016年6月に常滑市、2018年10～11月に長久手市）。

一方、課題もある。まず、情報リテラシー教育の重要性である。SNSで写真や動画を含む多くの情報を共有し、YouTubeやGoogleで豊富な動画や写真を入手できる時代にあつて、「自分で撮影し、加工し、発信する」というフィールドワークの原点が、時に軽視されてしまう事態が起こる。

「SNS を利用する感覚で、他人が撮影した作品を無断で流用することは絶対にあってはならない」ということを、授業の冒頭で強調する（亀井2017）。

また、近年の情報端末の便利さは、実は情報の扱い方を粗雑にしている面がある。旅先で撮影した写真を LINE や Facebook で共有し、その画像をダウンロードすると、画素数が減じて質の悪い写真になることがある。SNS で再取得したデータを A3 写真用光沢紙に引き延ばして印刷すると、画質の粗い作品となってしまうが、撮影時の元データで印刷するとこの問題は避けられる。さらに、印刷作業を行う場所にスマートフォンのみを持参して、どのようにデータを取り出して印刷すればよいのか戸惑う学生もいる。

情報端末での情報のやりとりがそれ自体として完結していて、それ以外へのアウトプット方法、PC を用いた作業、紙への印刷方法、データを移すためのケーブルの準備と使用方法など、情報を加工し、共有・発信するための選択肢を多くもたないケースが年々増加している印象がある。便利な情報端末とアプリの普及が、むしろ、情報の扱い方の選択肢を狭め、表現の自由を減じている側面についても考えさせられることが多い。

本プロジェクトは、SNS に代表される、簡便ではあるが限定的で受動的な情報伝達の消費者の立場に甘んじるのではなく、手作業も含めて、主体的に複数の手段を用いて情報発信ができるようになることを目指している。そのギャップを埋めることこそ、この演習の目的であると言えるであろう。

5. プロジェクト (5) 「『新聞記事にのっちゃんかも？岡崎の中心市街地の情報発信』プロジェクト」(松林康博)

課題解決型学習（以下、PBL）は、アクティブラーニングの一種で、溝上（2016）によると、実世界で直面する問題やシナリオの解決を通して、基礎と実世界とを繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度等を身につける学習である。増本（2018）は、PBL の効果として、奈良県における観光プラン提案活動を通じて、短期間で学生がチームワーク、リーダーシップ、意思疎通、調整力を涵養することについて言及している。また、高山（2012）は複数の PBL 科目を実践し、学生が現実社会で活躍する場面を用意することで学生の主体性が引き出せるとしている。

そこで本授業においては、「愛知県岡崎市の地元情報の発信」をテーマとし、実社会との関わり強化とゲーミフィケーション導入によって学生の主体性向上の工夫を取り入れた授業設計をした。ゲーミフィケーションとは、ゲーム以外のものをゲームとしてデザインすることと定義され（藤川2017）、教育分野においても学生の主体性向上のために用いられる手法である。

実社会との関わり強化に関して行ったことは、愛知県岡崎市でタウン誌を発行する株式会社リバーシブルと連携し、浅井朋親社長による「取材・カメラ撮影講座」の実施、同社のウェブメディア「岡崎パンチ」における特集コーナーの企画の許可の取り付け、また、受講生たちで活動内容に関するプレスリリースを作成し、新聞社へ投稿することである。

ゲーミフィケーションの導入は、講義最初のチームビルディングにおいて、マシュマロとパスタを用い、タワーの高さを競い合うマシュマロチャレンジ¹⁰⁾を実施、また、初回の岡崎市の商店街の視察の際に、オリエンテーリング、謎解きの要素を入れ、ゲーム性を入れ主体性を高める工夫を行った。

講義はチームビルディング、取材・カメラ撮影講座、岡崎市の視察を経て、受講生10人を3人ずつの3チームと1名を審査員として、「岡崎パンチ」の特集コーナーの企画を立案した。教員と学生の審査の結果、「あなたの知らない岡崎の楽しみ方」と題した特集を作成することとなり、チームを監督者2名、執筆者3名、編集3名、広報2名という体制で再び岡崎市を訪問し、取材し、コンテンツを作成した¹¹⁾。その後、広報担当からプレスリリースを発行し、中日新聞、岡崎経済新聞、東海愛知新聞の3紙で掲載される結果となった。学生からは、「外部からの教員でどのように講義が進むのか期待と不安があったが、ゲーム性を取り入れた方法は楽しく、またタウン誌のプロがその場で添削してくれるのはワクワクした」、「ターゲットを100種類設定する方法を聞いてやってみたら面白かったが難しかった。社会人との差を感じた」、「岡崎市民ながら松本町のことは知らなかった」、「こういう場所の魅力を発信したい」、「自分達で取材をするのは不安だったが優しくしてもらえ嬉しかった」、「新聞記事にしてもらうことは難しいとっていて実際に掲載してもらえると思わなかった」、「できたこともあったし、できないこともあった」というコメントがあり、楽しみながら主体性をもって講義に取り組み、地域に関する理解・愛着を深める

とともに、自己効力感の向上に効果があった。総じて、講義の目的は達成できたと思われる。今後の課題はPBLを通じた教育効果を評価する仕組みを構築し継続した改善に結びつけていくことである。

6. プロジェクト (6) 「ワンピースプロジェクト (1) : 地域の子どもたちに 県大の魅力を発信する : 国際関係学科学生オリジナルパンフレットの作 成とオープンキャンパス2018での活用」(高阪香津美)

2017年度後期の「ワンピースプロジェクト (1) : 地域の子どもたちに県大の魅力を発信する」には13名の学生が参加した。本プロジェクトでは、彼(女)らとともに、大学の広報誌は何冊かあるものの、それらが未来の県大生になりうる地域の中学生や高校生が知りたいことを反映したものになっているか、また、「読み物」としてふさわしいものになっているか、を出発点とし、大学とはどのようなところか、大学で学ぶとはいかなることかを地域に暮らす子どもたちに伝えるため、大学が発行する広報誌とは別に、「学生目線」で、本学、特に、国際関係学科の魅力を発信する冊子を作成するという活動を試みた。このPR冊子作りにおける学びが後の卒業論文の執筆にも有効に作用するよう、人を対象に調査する、文章を書く、写真を撮影する、そしてそれを掲載するときの約束事を身につける、だれが読み手であるかを考慮し求められている情報をわかりやすく伝える力を養う、身の周りに横たわっている課題に対する解決の糸口をみつける力を育むことを意識し、以下の手順で活動を進めた。

- (1)本学に関する広報関係の資料を「学生目線」で分析
- (2)意見交換と調査・分析により学科の魅力を反映した冊子作成のための掲載項目選び(写真5)
調査倫理の学習、ならびに、調査のための依頼状の作成
国際関係学科在学生に対するアンケート調査から「在学生が伝えたいこと」を探る
中高生へのインタビュー調査から「読み手が知りたいこと」を探る
- (3)冊子作成のための準備、素材集め
意見交換と調査・分析により選定された掲載項目である「学科紹介」、「年間スケジュール」、「教員紹介」、「国関生の1週間」、「国関生の休暇の使い方」、「国関生の留学」、「卒業生のインタビュー」を執筆する

ため、教員、卒業生、在学生への取材交渉と取材の実施

(4)地域の中学生、高校生に向けた国際関係学科PR冊子の作成

(5)活動を振り返りながら合同発表会の準備

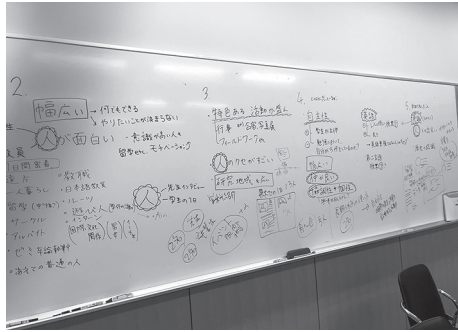


写真5 掲載項目の選定に関するディスカッション（受講生撮影）

こうした段階を経て引き出された学科の魅力である「多様性」、「主体性」、「人」、「自

主性」という概念を掲載項目の各所に散りばめた、情報内容、形式、構成すべてにおいてこだわり抜いた広報冊子が完成した。しかしながら、冊子を作成することが本プロジェクトのゴールではなく、地域の中学生、高校生に国際関係学科をよりよく知ってもらうきっかけ作りのために、この冊子をオープンキャンパスで活用することこそが本プロジェクトが掲げていた最終目標であった。そのため、2018年1月の授業終了後も冊子に掲載されている情報提供者すべてに対しオープンキャンパスでの使用の許可と情報内容の確認を行い、学科の了承を得た上で、2018年8月に実施されたオープンキャンパスにおいて、「学生目線」による国際関係学科の魅力を発信する冊子を学科のブースに設置し、実際にオープンキャンパスに参加した高校生やその保護者の目に触れる機会を得た（写真6）。

本プロジェクトの受講生で、オープンキャンパスにもサポート学生として参加していた学生は、国際関係学科学生オリジナル冊子を手にした高校生や保護者の感想や様子を次のように述べている。



写真6 授業の成果物（高阪香津美撮影）

- ・「こんなに大学が楽しそうな場所だとは思わなかった」、「みんな仲が良さそう」、「先生が優しそう」、といった今まで自分たちが持っていた大学のイメージをプラスに変えるような意見がありました。また、「国際関係学科ってよく分からなかったけれど、冊子を見てここに来たいと思った」、「他学科を第1志望にしていたけど、国際関係学科に変えなくなった」という未知の存在であった国際関係学科に興味を持ってもらえるきっかけになったという意見も多かったです。個人的に嬉しかったコメントは、「読んでいて飽きない」、「もっと読んでいたい」、「こういうものを授業で作れるんだ」という冊子に関するものでした。
- ・普段の学生生活に関する質問が多かったです。国際関係学科の1週間のページは条件の異なる様々な学生を取り上げていたため、通学時間や授業内容に関する疑問が解決したように見受けられました。また高校生だけでなく、保護者にも好評で、高校生よりも真剣に読んでいる保護者の方もいました。保護者からは通学や留学に関する質問が多かったです。

また、上記の学生は自らが作成した冊子を高校生や保護者が手にしている様子を目の当たりにしたときの思いや気づきについて次のように述べている。

- ・自分たちが長い時間をかけて作成した冊子が実際に学外の人に届いたことに感動を覚えました。また、読んでいる人はみんな笑顔で、中には夢中になって読んでいる人もいました。それを見て、「学生目線の、読み物としての学科紹介冊子を作る！」という目標は達成できたのだという清々しい達成感もありました。
- ・冊子全体を見ている高校生もいれば、国際関係学科に既に興味があつて、その中でも特に知りたいこと（留学など）のページを真剣に読んでいる高校生がいた点が印象に残りました。学生が冊子を見ているところにスタッフが話しかけると話も広がり、少し緊張している高校生も大学生のスタッフに質問しやすくなったのではないかと感じました。

このことから、本プロジェクトの成果物である冊子は、「在学生が伝えたいこと」と「読み手が知りたいこと」をマッチングさせ、掲載項目を選定するほか、構成や形式においても読み手を最大限に意識して作成した結果、高校生だけでなく、保護者にとっても「読み物」として魅力あるものになったことがわかる。また、この冊子は国際関係学科に関する情報提供のみならず、オープンキャンパスにおいて、高校生と県大生のコミュニケーションを促す役割をも果たしていたといえる。

振り返りの中で、本プロジェクトの受講生はこのたびの「学生目線」による学科広報誌作成という活動を通じた学びとして、「アンケートやインタビューで得た内容や、授業でのクラスの意見が自分の視野を広げてくれるものになったこと」、「色々な目線に立って物事を考えることの重要性」、「国際関係学科をアピールするためのパンフレットをつくる中で改めて知る学科の個性・良さ」の3点を挙げており、教室活動としても学びは大きかったといえる。しかしながら、上述のとおり、本プロジェクトが、成果物である広報誌を実際にオープンキャンパスで活用するという教室を飛び出した実践を盛り込むことにより、単に、「授業のための活動」、また、「授業評価のための成果物作成」に終わることなく、「問題解決のための活動」、そして、「必要としている人々のための成果物作成」であることを実感でき、受講生はより実りある学びと達成感を得たのではないだろうか。

2018年度後期は第2弾として、「ワンピースプロジェクト(2): 県大を支える人々の魅力を発信する」と題し、大学の主役である学生を支える人々にスポットをあて、彼(女)らの魅力を発信する活動を実施しており、2018年11月23日(金)のミニオープンキャンパスにおいて成果物であるポスターを展示した。「授業のための活動」、「授業評価のための成果物作成」に留まることのないよう、今後も活動内容を工夫し、受講生の大きい可能性を学びへとつなげていきたい。

第4節「プロジェクト型演習」の達成と課題

1. 「プロジェクト型演習」の特徴と達成

(1) 学生における学習上の効果

以上の実践事例に基づき、本演習科目の特徴、達成と課題をまとめる。まず、学生がどのような知識や技能を身に付けたかを振り返る。文献資料

収集、企画立案、フィールドワーク遂行、写真や映像の加工、プレゼンテーションなど、プロジェクトの特徴にも依るが、多様な知識、技能を習得する機会を提供した。外国人や社会人を含む学外の多様なアクターと協働することで、主体性や責任感をもつ、異文化への敬意を培う、地域への理解と関心を養うといった面も見られた。成果物が完成することに伴う達成感や満足感、おもしろさといった、感情面でのメリットも重要である。

(2) 社会貢献と情報発信

本演習は、具体的な成果物が完成することから、それらを二次的に利用した社会との連携事業などへとつながりやすい。外国人との交流行事、写真展や映像上映会、オープンキャンパスの活性化などの形で成果が活用され、履修学生以外の人びとに開かれた共有ができています。学会のサイドイベントの実施、企業や自治体との協働に発展したものもあった。こうした成果の活用は、学生の満足度や達成感をさらに高める効果をもっている。

こうした本学科の取り組みは学外からも注目され、複数の新聞において報道されたほか（中日新聞 2016; 岡崎経済新聞 2016; 東海愛知新聞 2016）、書籍の一部でも紹介された（河合塾編 2016）。また、担当教員により、教育実践事例として刊行、発表されたものもある（亀井 2016; 2017）。

2. 「プロジェクト型演習」の課題

(1) 実技系の授業における工夫、改善の余地

一方、授業を進める中で直面した課題もある。まず、このような「手を動かして学ぶ」授業に見られる困難さとして、学生たちの日常の生活スタイルとの乖離が挙げられる。スマートフォンでSNSなどの多様なサービスを使いこなしている学生たちの感覚からすれば、モノを加工して作品を創る経験は、新しい技能への挑戦である一方で、慣れない作業でもある。新聞切り抜きや写真印刷など、あえて手間のかかる「古風な」知的生産の技能を共有することでさまざまな経験を積むという演習の趣旨は揺るがないものの、学生の日常との乖離を埋め合わせる教員側の工夫が絶えず求められる。今後、その乖離がさらに拡大することも予期しておかねばならない。

また、このような演習が一定の達成を見たとき、それらをどのように評価して、今後の授業改善へとつなげていくかも課題である。

(2) 社会との連携を伴う教育の困難さ、課題

学外の多様なアクターと協働する場面では、先方の機関などとの間でのスケジュール調整に困難を伴うことがある。学年暦とは一致しない計画を立てる必要が生じ、夏期休暇や土日を用いた不規則な授業日程になることがある。また、たとえば外国人との交流計画を提案した時、先方の一部のメンバーのみが交流機会を享受できるという状況に不満が生じた例もある。

写真、映像、パンフレットなどの作品を、公開を前提に制作する場合、調査倫理、肖像権、著作権などをめぐる諸問題が、市民の権利に直接影響を及ぼすおそれもある。机上の理解ではなく、実践的にこれらの課題に取り組んでいかねばならない。社会連携の機能を併せもつ教育における、繊細かつ丁寧な指導が必要であることを実感する機会もあった。

3. 今後の展望

2014年度入学者からの5学年において必修科目とされている本演習であるが、2019年度入学者からは、選択科目へと変更される予定である。理由として、実技系科目はメリットも大きい反面、それを苦手とする学生も一部におり、全員の必修という束縛を緩める必要性が学科内で指摘されたためである。今後は必修ではなくなるものの、2年次後期の演習科目として定着していくことが期待される。

学科の特色を活かし、社会連携の機能も併せもつこの教育実践は、今後とも試行錯誤のなかで継続されていく。3年次以上の研究演習や卒業論文指導などと効果的に組み合わせ、大学と社会をめぐる流動的な同時代の状況を受け止めつつ、実践を通じてそのあり方を検討していく。新しい大学教育の役割を模索していく手がかりとして、本演習の教育実践事例と本報告が議論の一助となることを期待している。

【謝辞】国際関係学科の「プロジェクト型演習」が実現する上で、学内外の多くの方がたのお力添えをいただきました。とりわけ、主として愛知県を中心とする、学生たちの学びのために連携の機会をくださった学外の諸機関、団体、個人の各位に対し、担当者一同、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 第1節を宮谷、第2、4節を亀井が担当し、第3節は各プロジェクト担当者が実践内容を執筆した。最終的な取りまとめは、亀井が行った。
- 2) 基礎演習Ⅰの主な学習内容は次の通り。前期：図書館の利用方法、参考文献の探し方、参考図書の利用方法、レポートの作成方法。後期：施設見学、スピーチ、ポスター発表、レポート作成、レポートピア改善活動。
- 3) 具体的には以下のような情報である。
 - ・一般財団法人海外産業人材育成協会(AOTS)「経済連携協定(EPA)に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者に対する日本語研修事業」(<https://www.aots.jp/jp/project/epa/index.html>)
 - ・厚生労働省「インドネシア、フィリピン及びベトナムからの外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れについて」(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/gaikokujin/other22/index.html)
 - ・JICWELS(国際厚生事業団)「EPA 外国人看護師・介護福祉士受入れのあらまし(受入れパンフレットなど)」(http://jicwels.or.jp/?page_id=16)
- 4) MICEは、Meeting、Incentive travel(インセンティブ旅行)、Convention、Exhibition/Eventの頭文字を使った造語である。
- 5) 「直接指導を集団学習の場から独習の場へと移し、その結果として、集団学習の場を動的で双方向型の学習環境へ変容させる教育アプローチ」のこと(バーグマン・サムズ2015:33)
- 6) Facebook「あいちの広報広聴」(<https://www.facebook.com/aichikoho/>)
- 7) 名古屋国際会議場ニューズレターに取り組みが紹介されている。NCC News Vol. 15 (<http://www.nagoya-congress-center.jp/info/ct6798/>)
- 8) Instagram 常滑市観光協会公式アカウント「いっとこなめ」
- 9) 「愛知県立大学 Web ニュース」2017年10月20日 (http://www.aichi-pu.ac.jp/news/2017/news_20171020_1623.html)
- 10) 日本マシュマロチャレンジ協会によるマシュマロチャレンジの概要 (<http://www.marshmallow-challenge-japan.org>)
- 11) 「あなたの知らない岡崎の楽しみ方～愛県大×NPO法人コラボキャンパス三河～」(<http://okazaki-punch.link/aiken2015>)

文献

- 亀井伸孝. 2016. 「学生たちの潜在能力を活用するフィールドワーク教育：愛知県立大学国際関係学科「旅の写真展」の実践報告」日本文化人類学会第50回研究大会(2016年5月29日, 南山大学).

- 亀井伸孝. 2017. 「フィールドワークにおける視覚的表現の活用：社会調査実習の成果と近未来の課題」『社会と調査』19: 23-34.
- 河合塾編. 2016. 『大学のアクティブラーニング：導入からカリキュラムマネジメントへ』東京：東信堂.
- 高山進. 2012. 「様々なPBL 授業の実践とその振り返り」『大学教育研究：三重大学授業研究交流誌』20: 33-39.
- ドルニエイ, Z. 2006. 八島智子・竹内理監訳『外国語教育学のための質問紙調査入門：作成・実施・データ処理』東京：松柏社.
- バークマン, J.・A. サムズ. 2015. 上原裕美子訳『反転学習』東京：オデッセイコミュニケーションズ.
- 藤川大祐. 2017. 「アクティブ・ラーニングとゲーミフィケーション：「主体的・対話的で深い学び」のデザインに関する考察」『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第319集 教育におけるゲーミフィケーションに関する実践的研究(2)』1-10.
- 増本貴士. 2018. 「PBL（課題解決型学習）の手法を用いた集中授業と半期授業のあり方に関する一考察」『奈良県立大学研究季報』28(4): 27-44.
- 溝上慎一. 2014. 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東京：東信堂.
- 溝上慎一. 2016. 「アクティブラーニングとしてのPBL・探求的な学習の理論」溝上慎一・成田秀夫編『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』東京：東信堂. 5-23.
- 「愛知県立大学生が授業で岡崎の情報発信：外国語学部初のプロジェクト型演習」『岡崎経済新聞』2016年1月21日掲載. <https://okazaki.keizai.biz/headline/1300/>
- 「県立大生が地域情報発信：岡崎市サイトにPR記事」『中日新聞』2016年1月20日掲載. なごや東版(16面).
- 「康生地区の活性化を：愛知県立大生が岡崎を取材」『東海愛知新聞』2016年1月20日掲載. 1面.